Color Science Association of Japan

02

パーソナルカラー調和理論を取り入れた色彩教育の展開事例

The Case of the Color Education to have quoted Personal Color Harmony Theory

久保田　覚　Satoru Kubota　久保田色彩設計事務所　Kubota color design office

キーワード：色彩教育、パーソナルカラー、色彩調和
keywords : color education, personal color, color harmony

1. はじめに（色彩教育と色彩の授業）

色彩教育は、大学、高等学校、中学の「美術」、「色彩学」の授業を始め、「カラーコーディネート」と称する色彩の授業まで含め、専門学校やビジネススクール等のファッション系、コンピューター系、建築・インテリア系、医療系、フード系、等の広範囲の科目、講座に取り入れられるようになりました。また、色の大切さが認識され始め、色彩に関する資格検定試験が行なわれるようになってからは、多くの方がその資格取得を目指してきました。そして、資格を取得した後に「色彩の講師」となって教壇に立たれている方も多いことではないでしょうか。私もその一人なのですが、試験対策以外の色彩の授業では、如何にどのような方法を使って色彩の有効性を生徒に伝えるかが鍵になります。

美術や色彩学を専門にご指導されている先生方からすれば色彩教育と呼べるほどのものでは無い事を承知の上で、私が担当させて頂いている色彩の授業の中で、パーソナルカラー調和理論を取り入れた配色調和の指導例を紹介させて頂きたいと思います。

2. 目的（具体的な表現方法を求めて）

具体的成果として色彩の有効性を期待するならば、最初にデザインを考えなければなりません。色だけの表現は具体性に欠け、芸術家や一部の類希なる才能を持つ人を除いてそれは難しく、一般的にはデザインを起こしてイメージが生まれ、次にそのデザインイメージに合うような色彩を施す事となります。どのような分野の現場でも、色彩からデザインが生まれる事は少なく、色彩の授業の指導においても、先ずデザインを決めてから色付けが始まるのではないでしょうか。そこで、色彩とイメージとの関連性が高く、理解しやすいパーソナルカラー調和理論から、理論と実践を通して多くの生徒が容易に配色が出来るようになる事を目的と考えました。

3. 資料

パーソナルカラー調和理論は、色相をウォームとクールの2分類する考え方から始め、主流となっている四季分類の考え方とを併せてその調和理論とし、指導を行なっています。Johannes Ittenの「色彩をつなぐ5本の主要な道」（色立体、帯による立体化1921）の起点となる色相、及び、F.Birrenの色彩調和論（説）の一つに考えられているウォーム感とクール感の基準となる色相は、共にオレンジと青が選ばれています。これは、パーソナルカラーのウォームとクールの2つの色群を考える出発点と言えるでしょう。そして、2つの色群から更に明度・彩度によりイメージが付け加えられ、パーソナルカラーの四季分類である春夏秋冬の4つの色群に構成されますが、四季配色実習の統計をまとめると実際の季節からイメージされる夏と冬の色群についてはパーソナルカラー理論に定める色群とは反対のイメージの色群となります。

4. 方法（理論と実践）

4-1 パーソナルカラー調和理論を理解させる

① 2つの色群

先ず、最初に色相の暖・寒を理解することから始めます。色彩教育の多方面で使用されているPCCS配色カード199を使い、F.Birrenの色彩調和論（説）に従って、最も暖かさが感じられる色相5:0と最も冷たさが感じられる色相17:B、18:Bを基にして基本5色（RYGBP）に対して隣接色相を選んでウォーム感とクール感の色みの違いを見つけます。(Table-1)

<Table-1. 基本色相のウォーム感とクール感>

ウォーム感	基準とする色相	クール感
黄みの赤 v3	←赤 v2→	紫みの赤 v1
赤みの黄 v7	←黄 v8→	緑みの黄 v9
黄みの緑 v11	←緑 v12→	青みの緑 v13
青 v17	←青 v18→	紫みの青 v19
赤みの紫 v23	←紫 v22→	青みの紫 v21

② 各季節の色群の特徴

次に、パーソナルカラーの四季イメージの特徴を理解させるために、明度と彩度を複合したPCCSトーンに当てはめてみます。(Table-2)

<Table-2. 各季節の三属性の特徴とトーンの関係>

	色相	明度	彩度	トーン
春	ウォーム	中～高	高	b, lt+, v, dp
夏	クール	高	低	ltg, g, p+, ItGy, mGy
秋	ウォーム	中～低	中	d, sf, s, dp, dk
冬	クール	中～低	高、低	v, p+, dp, dkg, W, Bk

③ 各季節の具体的なイメージの強さ

より具体的に各季節のイメージの強さを把握させるため、各季節をイメージさせる代表的なトーンを選び、同明度で心理補色の関係にある2:R−14:BGをその中心明度と考え、明度・彩度に対する斜線の長さをイメージの強さとして三平方の定理を用いて算出します。数値が大きいほど色の負荷が

NII-Electronic Library Service

Color Science Association of Japan

大きくなりイメージが強くなるという考え方です。

イメージの強さ＝$\sqrt{(理想の白-lightness)^2+saturation^2}$

春のｲﾒｰｼﾞ＝$\sqrt{(10-6.0)^2+8.0^2}$≒8.94… bright tone

夏のｲﾒｰｼﾞ＝$\sqrt{(10-7.0)^2+2.0^2}$≒3.61… light grayish tone

秋のｲﾒｰｼﾞ＝$\sqrt{(10-4.5)^2+5.0^2}$≒7.16… dull tone

冬のｲﾒｰｼﾞ＝$\sqrt{(10-4.5)^2+9.0^2}$≒10.55… vivid tone

4-2 パーソナルカラー調和理論を実践する

①メイク実習における表現事例

情報系、医療系専門学校、ビジネススクール

「カラーコーディネート（メイク実習）」

男女比率／男子6%、女子94%

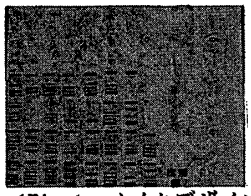
【用具】メイク用具、色鉛筆、配色カード199、雑誌、他

【指導の狙い】パーソナルカラーが肌の色及びその人のイメージとの調和を考えたものですから、メイクはその色彩調和の最も具体的な表現方法であると言えます。肌色カード(PCCS配色カードFL-1～6)を用いて自分の肌の色に近いと思われるカードを第三者に選択して貰い、選ばれた肌色カードの三属性の特徴からパーソナルカラー理論に合致する季節の色群を決めます。イメージに合う顔のパーツプロポーションを描いてデザイン画を作り、カラーリングする髪の色から、ジャケット、スカート、インナー、シューズまでを配色カードから選択し、トータルファッションカラーコーディネートの力を養います。更に、ノーメイクが可能であれば対面してメイクをし合う事で、より効果的な実習が出来るでしょう。

【カリキュラムの内容】

・色の基本（色彩学の基礎）

・PCCS配色演習、パーソナルカラー調和理論



・雑誌切り貼りによるウォームカラーとクールカラーの分類練習

・メイクデザイン画作成（Fig-1）

・カラーコーディネート配色演習

<Fig-1. メイクデザイン画と配色演習>

②店舗デザインにおける表現事例

調理師専門学校、製菓・製パン技術科

「店舗デザイン」

男女比率／男子25%、女子75%

【用具】色鉛筆、プレゼンボード、発泡スチロール、他

【指導の狙い】将来のパティシエを目指す、お菓子作りの専門学校の店舗デザイン授業では、最近流行のsweetsの店舗デザインを考え、地域に合う色彩店舗模型を製作します。インテリア素材としてファブリック系は、カラードレープのチップを使って視覚的に各季節の色群のまとまりを理解させ、出店地域に調和する様、各季節のイメージを参考にして店舗の配色計画を行ない、自分達が将来持ちたい「城」を具体化させていく事を狙いとしています。

<Fig-2. 出店先地域>

銀座　下北沢　三軒茶屋　代官山　お台場

【カリキュラムの内容】

・色の基本（色彩学の基礎）

・PCCS配色演習、パーソナルカラー調和理論

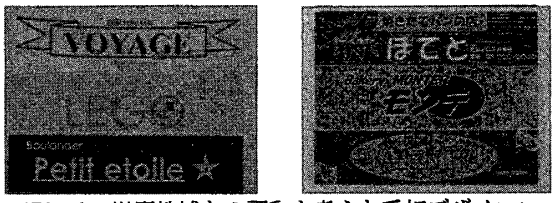
・インテリアの一消点パース作成、プレゼンボード製作

・出店先の地域調査（Fig-2）

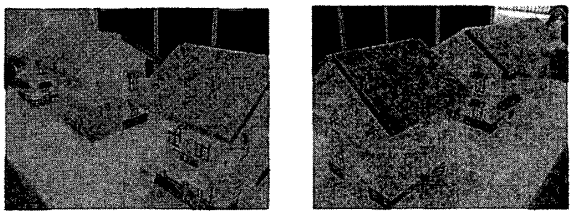
・地域のイメージに調和する看板製作（Fig-3）

・同一モデルによるS=1/30 店舗配色模型の製作(Fig-4)

・プレゼンテーション



<Fig-3. 出店地域との調和を考えた看板デザイン>



<Fig-4. 発泡スチロールと色紙による店舗配色模型の製作>

5. 考察

①カラーコーディネートは色の調和だけではなく、お洒落の要素も重要且つ不可欠です。基本的なメイクのプロポーションの描き方を指導した後、パーソナルカラーの各季節の色群を考えながら、好きなファッション雑誌を参考にしてメイクデザイン画を描きます。トレンドデザインと共に流行色も考える必要性がありますから、雑誌は有効な教材となります。

②店舗デザインの授業では、パーソナルカラー本来の調和理論による肌の色と似合う色との関係を切り離して考え、各季節の色群のまとまりとイメージから配色計画をしていきます。ただ、お菓子をはじめとするフード関連の店舗はウォーム系で統一される場合が殆どのため、クール系での配色計画は少なくなりますが、お菓子の彩りからインテリア空間、ファサードに至るまで、その応用範囲は広いと言えるでしょう。

6. まとめ

色彩調和の一つとして考える事が出来るパーソナルカラー調和理論は「まとまり」に優れていますが、色は色相・明度・彩度において連続性を持っていますので、各季節の境界曖昧域をどのように考えるかが課題として残されます。色彩の講師として知識を「講ずる」だけでなく、自らが手を動かして表現力を養う力を教えていく必要が有る事を、常日頃、自分自身に問い掛けています。ご参考になれば幸いです。

≪参考文献≫

1)ヨハネス・イッテン造形芸術への道　JOHANNES ITTEN WEGE ZUR KUNST 2003-2004　京都国立近代美術館　2003

2)「色彩の科学　その心理と生理と物理」金子隆芳　朝倉書店　1999

3)「肌の色と表現する色彩との関連性を探る」久保田　覚　パーソナルカラー研究会　2003

4)「カラーコーディネーター入門色彩」日本色研事業株式会社　2002

NII-Electronic Library Service